慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	和製新漢語の造語にともなう意味変化について：「なりはて」から「成果」へを例として
Sub Title	
Author	鄒, 文君(Sū, Bunkun)
Publisher	慶應義塾大学日本語・ 日本文化教育センター
Publication year	2022
Jtitle	日本語と日本語教育 No.50 (2022. 3) ,p.5- 22
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	刊行50周年 特集：修了生の現在 〔最近の研究から〕1
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20220300-0005

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』50：5–22（2022.3）

和製新漢語の造語にともなう意味変化について

―「なりはて」から「成果」へを例として―

鄒　　文　君

0.　はじめに

本稿は、2017 年立教大学大学院に提出した学位請求論文『原因・結果を表す漢語についての研究』の一部を独立させ、新たな調査を加えてまとめたものである。

1.　造語法における「訓読みから音読みへ」の視点

和語の漢字表記の訓読みから音読みへの変化は和製漢語の造語法の一つである[1]。古くからの「返事（かへりごと→へんじ）」「大根（おほね→だいこん）」「出張（ではる→しゅっちょう）」、近代以降の「中継（なかつぎ→ちゅうけい）」「競合（きそいあい→きょうごう）」「転落（ころびおちる→てんらく）」のように、和語に当てた漢字を音読みすると漢語になる。これらの漢語は、訓読みという形式的な装いを換えただけで、意味的には通常もともとの和語と同一であると考えられる。

漢語「成果」は、現代日中両言語においても「よい結果」の意で用いられているものである。『日本国語大辞典』（以下、『日国』と略）では『漢語大詞典』の例よりも古いものを掲げ[2]、漢籍の出典もないため、和製漢語であると考えられる。そして、『明治のことば辞典』などの先行研究によると、幕末・明治初期から「issue」「result」の訳語として『英和対訳袖珍辞

書』などの英和辞典に用いられている。しかも、「なりはて」の当て字「成果」に由来し、上記の「訓読みから音読みへ」の造語法によるものである。

しかし、「成果」は、語源とされる「なりはて」が古くから「好ましくない結果」をさすことが多いのに対して、現代語における「成果」は結果の中でも好ましいものである場合に用いられている。このような意味上のマイナスからプラスへの変化がどのように発したのか、「訓読みから音読みへ」の変化に関わったかどうかなど、未解明な点がある。ほかに、漢語化の背景、意味の由来、「結果」などの類義語との関係などの点も注目される。

したがって、本稿では「訓読みから音読みへ」の造語法によってつくられた和製漢語のうち「成果」を対象に、語誌を考察することを通して、その成立および意味変遷の要因について論じてみることにする。

2. 漢語「成果」についての先行研究

漢語「成果」に関しては、『明治のことば辞典』（1986）は、「なりはてる」の名詞形「なりはて」の当て字「成果」を音読みした語としている。同書によると、文久 2（1862）年に成立した『英和対訳袖珍辞書』における「issue」「result」の訳語には、「成果」という漢字で表記されたものが見える。そして、明治 2（1869）年刊の薩摩学生編集『和訳英辞書』（薩摩辞書）には「result 成果（ナリハテ）」と、明治 6（1873）年刊の『附音挿図英和字彙』には「effect　成果（ナリハテ）」とあるのも示されている。

次に、『幕末・明治初期　漢語辞典』（2007）では、『米欧回覧実記』（明治 11 年刊）に「常人ヨリハ専一ニ勉励スルニヨリ、其成果ヲ増シテ、自然ニ一己ノ自活スル業ヲウルモノナリ（明治 6 年 1 月 15 日）」とあることによって、「成果」がその著者である久米邦武による造語かと推測されている。しかし、『米欧回覧実記』の原文には振り仮名がついていないため、漢語であるかどうかについてはまず判断不能である。そして、そのような

「名人造語説」については慎重に検証する必要がある[3]。

また、『日国』の掲載例で、『哲学字彙』（1981）の「Product 成果、物産」が見える。1880 年代にその新しいプラスの意味でも用いられていたことがわかる。一方、前記のように、漢籍の出典はない。

3. 漢語「成果」の由来

3.1 漢籍において

漢籍で確認すると、語彙レベルではないが、「成果」は、以下のような文字列に見える。

（1）法能除衆苦 亦能成果実（東晋訳経（『阿含経』）、東晋）
（2）計功成果就、無真教、郭景飛仙。（張継先「春从天上来・鶴鳴奉旨」『全宋詞』、宋）
（3）他日功成果満，作為上卿。（『水滸伝』、元明）
（4）宋江与衆人道："我毎受了招安，得為国家臣子，不枉吃了許多時磨難，今日方成正果！"（『水滸伝』、元明）
（5）要従那橋上行過去，方成正果哩。（『西遊記』、元明）
（6）月娘因問王姑子："後来這五祖長大了，怎生成正果？"（『金瓶梅』、元明）

その中、「果（実）」は、仏教的意味で「果報。よい報い」を意味する。「功成果就」と「功成果満」といった四字語は、名詞「功・果」と動詞「成・就（満）」による組み合わせで、「功就（満）果成」のように順番を換えても成立するものである。また、「成正果」という表現は、元明時代の白話小説で多く見られる。「正果」は、「仏道修行の結果会得される究極の境地」を意味し、前に「成」が付くと「正果を成す。正果に成る」の意味になる。これらの中国語表現は、仏典や白話小説とともに日本にも移入されたと思

われるが、漢語「成果」の造出に関わった証拠は見当たらない。

3.2　訳語として

文久 2（1862）年に刊行された、日本初の本格的な英和辞書とされる『英和対訳袖珍辞書』初版は、英蘭辞書である H. Picard『A New Pocket Dictionary of the English–Dutch and Dutch–English Languages. 』（以下、「ピカード英蘭辞典」と）を基に編集されたものとされ、その訳語の約 6～7 割が蘭和辞典「和蘭字彙』（1855～58）の訳語と一致すると、複数の先行研究（森岡・田島（1965）、永嶋（1970））で指摘されている。『英和対訳袖珍辞書』に収録された「成果」は、先行の『和蘭字彙』においても見られる可能性がある。

そこで、ピカード英蘭辞典で「成果」が訳語である「event」「issue」「result」に対応するオランダ語について調査した。共通の訳語として「uitslag」とあることがわかる。

（7）Event,　s. gebeurtenis, f. uitslag. m.
Issue,　s. uitgang. uitslag. m. uitkomst, f. uiteinde, n. uitstorting. fistel, fontanel. opbrengst. f. kroost., n. nakomelingschap
Result,　s. gevolg, n. uitslag, m. uitkomst. f. besluit, n. slotsom, f. resultaat, n.　（ピカード英蘭辞典、1843）

次に、『和蘭字彙』で「uitslag」の日本語訳について確認すると、名詞である「uitslag」の訳語に「成り果」とあることが判明した。

（8）uitslag,　uitkmost, gevolg.　成リ果。
Ik vreeze voor eenen kwaaden uitslag　我ハ事ノ悪シキ成リ果ヲ恐レテ居ル
Wat uitslag de zaak ook neemt, het is my even eend 事ガ如何様ノ成リ果ニナルトモ我ニ於テハ頓着ハナシ（『和蘭字彙』、1855～58）

『和蘭字彙』は天保 4（1833）年ごろに完成した『ドゥーフ・ハルマ』（通称「長崎ハルマ」）の校訂版とされている。『ドゥーフ・ハルマ』で確認した結果、その記載が『和蘭字彙』と同じである。ほかに、寛政 8 年（1796）年に成立した『波留麻和解』（通称「江戸ハルマ」）と文化 7（1810）年に成立した『訳鍵』の「uitslag」の訳語に「成り果」は見当たらないため、辞書登録として『ドゥーフ・ハルマ』は最初であろう[4]。

さらに、ピカード英蘭辞典で、「uitslag」に当たる英語について調べると、「issue」「event」とあることがわかった。オランダ語「uitslag」と英語「issue」や「event」と日本語「成り果」のつながりが明らかになってきた。

(9) Uitslag,　m. issue, event, sale, mouldiness, eruption, turning.（ピカード英蘭辞典、1843）

このように、英和辞典で「event」や「issue」の訳語として現れた「成り果・成果」は、蘭和辞典に由来したものである。

3.3　幕末・明治期の英和辞典において

さらに、幕末・明治期の代表的な英和辞典：(1)『英和対訳袖珍辞書』(1862)；(2)『附音挿図英和字彙』(1873)；(3)『哲学字彙』(1881)；(4)『和訳字彙: ウェブスター氏新刊大辞書』(1888)；(5)『井上英和大辞典』(1919) で「成果」が訳語とされた「effect」「event」「issue」「product」「result」を対象に調査すると、以下の通りである。

表のように、『英和対訳袖珍辞書』における「成リ果」と「成果」という表記の違い、『附音挿図英和字彙』における「ナリハテ」と「デキバヘ」という振り仮名の違い、『哲学字彙』において「product」の訳語として世態学（社会学）用語と記されていること、代表的な訳語としての「結果」と「成果」の位置づけの変化などの点が注目されている。総じて、「成果」は「result」の訳語としては安定している。

	effect	event	issue	product	result
『英和対訳袖珍辞書』1862	效験、功績、続キ、事ノ次第、終リ	事情、出来ㄱ、成リ果、結ヒ目ヲトク	成果、終リ、功績、出来バヘ、流出、子孫、打膿	産物、商　算術ノ語	成果、ノ高
『附音挿図英和字彙』1873	成就（ジャウジュ）、功績（イサカシ）、成果（ナリハテ）、效験（シルシ）、関係（クハンケイ）、利益（リエキ）、意思（オモヒ）、事實（ジッツ）	事情（ジャウ）、偶然（グウゼン）ノ事（コト）、成果（ナリハテ）	出（イデ）、功績（デガラ）、流出（ナガレデ）、結果（デキバヘ）、發行（ハッコウ）、関係（クワンケイ）、出口（デクチ）、效験（シルシ）、子孫（シソン）、産物（サンブツ）、打膿（ダノウ）、結局（マトマリ）	産物、成果（デキバヘ）、工業（サンパウ）、績（セキ）（算法（ゴ）ノ語）	跳反（ハネカヘリ）、関係（クワンケイ）、成果（ナリハテ）、結果（デキバエ）、落着（ラクヂャク）、決議（ケッギ）
『哲学字彙』1881	結果、應報、效験、果報		發貨（財）	成果（世）、物産（財）	成効、菓實、結果
『和訳字彙：ウェブスター氏新刊大辞書』1888	成就、功績、成果、效験、関係、利益、意思、事實、〔哲〕應報	事件、事情、偶然ノ事、成果、関係、出来事	出、功績、流出、結果；事件、関係、出口、効験；…	生産物、産物、農産、製作物、貨物；効験、結果、工業；〔數〕積、相乗得數	結果、成果、効験、効積、結局、収尾、決議
『井上英和大辞典』1919	㊀結果，成果，効果．㊁有効，きき，効力，效験，實効，効能．…	㊀場合，折．…㊄結果，結局，成行，勝敗の決．…	㊀發出，流出．㊁終了，結末，終局．…㊈結果，効果．…	㊀産，産物，産出物，生産品．…㊂結果，効果．…	㊀結果，結末，成行（ナリユキ），成果，帰著，帰結．…

3.4　漢語化

漢語であるための前提条件として、「成果」が音読みされている証拠は必要である。調査した限りでは、明治 12（1879）年に刊行された『新撰伊呂波字引』の例が古い。音読みとして「セイクワ」とあり、意味解釈（訓）としては「トゞノ　シマイ」とある。

（10）成果（セイクワ）　トゞノ　シマイ　（宇喜多小十郎『新撰伊呂波字引』、1879）

また、1885 年に成立した『広益漢語字解』と『雅俗漢語字引大全』にも「成果」の字音読みが収録されている。それによって、「成果」は、遅くても 1880 年代に漢語として成立したのである。

（11）成果（セイクワ）　トゞノ　シマヒ　（藤田善平『広益漢語字解』、1885）
（12）成果（セイクワ）　タマイノ冂　（中田幹母『雅俗漢語字引大全』、1885）

一方、『言海』や『日本大辞典』など明治期の代表的な国語辞典には、「成果」の見出しはない。20 世紀初期の『辞林』にも「成果」の項目はないが、「因果」の意義解釈に「成果」と使われている。

（13）（いん-ぐわ［因果］（名）㊀原因と結果と、㊁原因と結果とを連結したる関係、即ち、一が他に対して変化の基因となり、他が一に対して変化の成果となる状態、㊂前業の応報、むくい、㊃｛ふ・あはせ。（『辞林』、1907）

なお、1923 年刊の『現代国語辞書』には「セイカ　成果」と見られるが、この辞書は、主に新聞に現れる新語などの現代語を集めたものであるため、一般の国語辞典とは異なっている[5]。本格的な国語辞典の収録に関しては、調査した限り、昭和 18（1943）年刊、金田一京助編『明解国語辞典』が最も早い。このように、「成果」が日本語として完全に定着したのは昭和以降であろう。

（14）セイカ　（名）成果。（ーくぁ）（松本重彦『現代国語辞書』、1923）
（15）せえ-か［成果］セイクヮ（名）できあがった結果。（金田一京助

『明解国語辞典』、1943）

4. 「なりはて」から「成果」への意味変化

4.1 「なりはて」について

漢語「成果」の語源である「なりはて」は、『日国』によると、「物事の終わった結果。のちの事。なれのはて」の意であり、室町時代に成立した『史記抄』にその例が見える。用例中の「なりはて」は、「（東西周の）最期。滅亡」の意である。

（16）事のついでに東西周のなりはてを云ぞ（『史記抄』三・周本紀、1477）

そして、17 世紀初頭の『日葡辞書』にも「Narifate」の項があり、その動詞形である「なりはてる」の用例が挙げられている。『日葡辞書』の収録語彙は、当時の日常語を中心としているため、「成り果てる・成り果て」も、当時の日常語であろう。例に現れた「頼む方なく」や「心細い」によって、消極的な場面であることが明白である。ここの「成り果て」は、「好ましくない状態になる」という意味で用いられていると考えられる。

（17）Tanomu catanacu, narifatete cocorobosocuzo voboye qeru.（『日葡辞書』、1603）
（頼む　方なく、成り果てて　心細いぞ　覚え　ける。）

また、前掲の『和蘭字彙』の用例「Ik vreeze voor eenen kwaaden uitslag 我ハ事ノ悪シキ成リ果ヲ恐レテ居ル」「Wat uitslag de zaak ook neemt, het is my even eend 事ガ如何様ノ成リ果ニナルトモ我ニ於テハ頓着ハナシ」においては、「成リ果」は、前に「悪シキ（kwaaden）」「如何様ノ（wat）」のような修飾語がついているが、原語「uitslag」に応じて単なる結果の意を表す

ものであろう。後継の『英和対訳袖珍辞書』などの英和辞典においても、もともとの「好ましくない結果」の意味ではなく、単なる結果の意味で用いられていると考えられる。

なお、『和英語林集成』（ヘボン著）の初版と再版には、単に「The end（終わり。結果）」とあるが、三版には、「bad end（悪い結果）」とあり、本来の意味が追加されている。

（18）NARI-HATE, ナリハテ, 成果, n. The end of one's course, final condition of life.（『和英語林集成』初版、1867）

（19）NARI-HATE ナリハテ 成果 n. The end, result. Syn. YUKUSUE.（『和英語林集成』再版、1872）

（20）NARI-HATE, ナリハテ, 成果, n. A bad end or the end of one's evil course.（『改訂増補　和英英和語林集成』第三版、1886）

4.2 「成果（ナリハテ）」と「成果（デキバエ）」

前掲の通り、『附音挿図英和字彙』では「成果」の振り仮名に、「ナリハテ」（effect、event、result）と「デキバヘ（できばえ）」（product）とある。「ナリハテ」は、ふつう「よろしくない結果」の意であるが、明治初期の英和辞典においては、前述のように、『和蘭字彙』（『ドゥーフ・ハルマ』）から受け継がれた、中立的な「結果」の意である。それに対して、「できばえ」は、もともと「できあがった様子。できあがりのよいこと」という意味で、「なりはて」とは正反対の意味特徴を持つ語である[6]。『英和対訳袖珍辞書』に「Issue 成果、出来バヘ」とあり、『附音挿図英和字彙』にも「結果（デキバヘ）」（issue、result）と「成果（デキバヘ）」とある。

「できばえ」の訳語としての由緒を明らかにするために、前述のピカード英蘭辞典を通して、「issue」「result」「product」に該当するオランダ語「uitkomst」の存在を把握した。

（21）Product, s. voortbrengsel, uitwerksel, product, n. uitkomst, f. （ピカード英蘭辞典、1843）

その「uitkomst」と「uitwerksel」（「product」に当たるオランダ語）の和訳を『和蘭字彙』で調べると、訳語に「出来バヘ」とある。英和辞典の「できばえ」も蘭和辞典に由来したものであることが判明した。

（22）uitkomst, uitslag. 出来バヘ
De uitkomst zal het leecen. 出来バヘガ其事ヲ知ラスルデアラウ（善悪ハ出来バヘニテ知ルノデアラウト云意）
uitwerksel. マサニ然ル可キトコロ 又出来バヘ。
Een uitwerksel van den haat. 恨ノ出来バヘ（恨ニヨリテ出来タル事ヲ言フ）（『和蘭字彙』、1855～58）

また、『和蘭字彙』の「できばえ」は、「uitwerksel」の例にある「出来タル事」という注解のように、単に「出来た事」の意である。それによって、訳語としての「できばえ」は、「なりはて」と同じ中立的な意味で用いられている。英和辞典における「できばえ」も、単に「なりはて」の類義語として扱われている。例えば、『英和対訳袖珍辞書』における「Issue 成果、出来バヘ」、『附音挿図英和字彙』における「result 成果（ナリハテ）、結果（デキバエ）」は、そのように見える。しかし、ここでなぜ「成果（ナリハテ）」や「結果（デキバヘ）」が「product」の訳語にならないのかという疑問が生じてきた。

それらを解明するために、まず「成果（ナリハテ）」と「成果（デキバヘ）」の関係を整理する。「成果（ナリハテ）」という漢字表記は、従来の「成リ果」を踏襲したものであるが、「成果（デキバヘ）」という漢字表記は、類義語である「なりはて」から借用してきたものである。中立的な結

果を示す「result」などの訳語として、「成果（ナリハテ）」「成果（デキバへ）」「結果（デキバへ）」の三者は類義的なものであるが、「product」の訳語にあたっては、「結果（デキバへ）」よりも「成果（デキバへ）」、「成果（ナリハテ）」よりも「成果（デキバへ）」の方が適切であるという訳者自らの漢語感覚が反映されていると考えられる。

本来、「product」は、生産的な意味を持つ概念であり、消極的な意味を表す「なりはて」が訳語としてはふさわしくないと考えられる。また、「結果」は、中国語から借用された漢語であり、中立的な「結果。結局」という意味のほかに、白話小説などで「押し片付ける。殺す」の意味でも多用されている[7]。それに対して、「成果」は和語「なりはて」の当て字であり、漢籍にはないため、捉え方によって意味が変容する。例えば、「成」は「成就」や「成功」における「成」のように、「果」は「果報」や「果実」における「果」のように、同じ「できばえ」のプラス[8]の意を持つ類義の類義の一字漢語の結合と見なすことができる。

このように、「なりはて」の漢字表記「成果」が「product」の訳語に用いられたのは、潜在的に積極的な意味を表せるからである。実際に、1870年代初頭に成立した中村正直訳著『西国立志編』に、下記のように、プラスの意を示す「果実（デキバエ）」「成効（デキバエ）」が見える。『附音挿図英和字彙』における「成果（デキバエ）」は、「成効」に当たる「成」と「果実」に当たる「果」の結合によって造成されたものである可能性が十分ある。

（23）人ノ一生ハ特に心志ノ勞苦或ハ肢體ノ勞苦ニ由テ菓實（デキバエ）ヲ結フ冂アリ（中村正直訳『西国立志編』八・三、1870～71）

（24）職務ヲ做シテ成効（デキバエ）ヲ得ルノ道マタ専心勉力ニアリ（中村正直訳『西国立志編』九・五、1870～71）

なお、『附音挿図英和字彙』の訳語について、付けられた「音」（フリガナ）は、『和蘭字彙』から継承されたものであるが、その漢字表記は、すでに訳語として成立した「ナリハテ」や「デキバエ」のような和語の口語的表現を実用的文章に用いるために漢字で表記されたものであろうと考えられる。明治の英学者は漢語尊重の伝統を受け継ぎ、漢字表記による語を学術用語と考え、漢字を好む気風を示している。そのため、『附音挿図英和字彙』のように従来の訳語を漢字化する工夫も見られる。

4.3　意味の推移

「成果」という漢字表記語は、幕末・明治期の出版物のうち、とりわけ和訳洋書で多く見られる。「effect」や「result」の訳語として用いられていることがわかる。

（25）後日に於て現ハるゝ遺傳（ゐでん）の成果（できばえ）（『婦女性理一代鑑』、1879）
　（英語原文：LATE MANIFESTATIONS OF THE EFFCTS OF INHERITANCE）

（26）始戰ノ論及ヒ交戰ニ因テ直チニ生スル所ノ成果（『恵頓萬國公法』、1880）
　（英語原文：COMMENCEMENT OF WAR, AND ITS IMMEDIATE EFFECTS）

（27）修史法ノ背理ハ時世自然ノ成果タリシヲ論ズ（『英国文明史』、1883）
　（英語原文：This absurd way of writing history was the natural result of state of the age）

その「成果」の意味的推移を考察するために、『太陽』コーパスを利用して「成果」の用例を集めると、1895 年と 1901 年の差が顕著的であることがわかった。1895 年の例には、単なる結果を表すものとマイナスの結

果を表すものと「実を結ぶこと」の意で用いられたものが混在している。

(28) 第二回軍事公債の成果（「商業」、『太陽』1895 年第 1 号）
(29) 一花内の雌雄の交接するを防ぐを常とし成果の状に就きて観るも若干の度までは種類を異にせるもの丶間に交接し成れる果実は品質も好く收穫も多きを例とす（矢部規矩治「農業」、『太陽』1895 年第 4 号）
(30) 今に支那人民の半数は廃棄物となり、浅ましき有様と成果たり。（久米邦武「倫理の改良（三）」、『太陽』1895 年第 8 号）

それに対して、1901 年の例には、「自然の成果」（「露国の宮廷」）のように、中立的な「結果。できばえ」の意を表すものがあれば、「隆盛を致したる成果」（「政党及議院政治の弊」）のように、明らかにプラスの「できばえ」の意を表すものもある。このように、英和辞典によって導入された「成果（ナリハテ）」と「成果（デキバエ）」は、1901 年の時点で、かなり普及してきたと見られる。

(31) 其民種の勇敢剛毅の気象に依り他に比類なき隆盛を致したる成果と相錯綜し、（「政党及議院政治の弊」、『太陽』1901 年第 13 号）
(32) 外務卿に任命なきは素より論なくコンスタンチノーペルより移されてジノヰ゛イフを以て之れに代らしめらるゝに至れるは寧ろ自然の成果にあらずや、（日下逸人訳「露国の宮廷」、『太陽』1901 年第 14 号）

また、1895 年から 1901 年の間に「結果。できばえ」の意味を示す「成果」の普及が加速している理由については、「外交成果」のように話題に関わって新聞記事の題名ともされた用法が現れていること、「射撃成果表」

のように「出来上がった結果」を表す軍隊用語として定着していることなどが考えられる。

（33）（題名）憲政（けんせい）内閣（ないかく）の外交（ぐわいかう）成果（せいくわ）　（読売新聞 1898 年 11 月 10 日朝刊）

（34）第百九十五　講評ハ射撃一般ノ成果ヲ掲載スルモノニシテ演習指揮官之ヲ記入ス（『野戦砲兵射撃教範』五・「射撃成果表」、1897）

さらに、『太陽』コーパスの 1925 年の例を見ると、プラスの結果を表すものがほとんどであり、「研究成果」のような高次結合の合成語も現れてきた。この時期に至っては、「成果」の現代語的意味が定着した。

（35）又感染の初期の者（潜伏期の初め）に對しては麻疹の發病を防疹する效力を有する事が則ち其研究成果である、（石原喜久太郎述「麻疹の予防の急務」『太陽』1925 年第 1 号）

（36）それと同時に、その中に成育し棲息する植物や魚類、それらの正確な研究といふより以上の結果を生まないとしても、それだけでそれは十分立派な成果を收めることゝなるのである。（「北極探検より帰りて」『太陽』1925 年第 11 号）

4.4　変化の要因

20 世紀以降、「成果」がプラスの意に傾いていく原因については、まず、外部環境では、日本語における漢語「結果」の定着によって、純粋に「結果」を表す語としてその需要性が低下していることがあげられる。

次に、漢語化によって語の内部の意味的構造も変化してきた。「成果」の語源である和語「なりはて」は、複合動詞「なりはてる」に由来し、変化の意を表す動詞「なる」と完了の意を表す動詞「はてる」にそれぞれ

「成」と「果」を当てたものである。後部要素「はてる」は、補助動詞的な存在とも言える。しかし、漢字「果」に対して、「はてる」自体は日本独自の意味解釈、いわゆる「国訓」である[9]。漢語化した「成果」は、そのような意味関係を引き継ぐことが難しいため、意味構造の不安定は必至である。それは、前述の「結果」との競合で負けた要因とも考えられる。このように、語を存続させるには、適当な字義で内部の意味的構造を再建しなければならない。それによって、語の意味も変化するのである。

前述のように、「成果」は、「できばえ」の意を表す「成」と「果」の並列による合成語と見られる。また、下記のように、「成」は「成効」または「成就」の意で、「結果」を表す「果」の修飾語であるとも解釈できる。こうした公文書における使用と定義によって、「成果」はプラスの意味で「よい結果」を示す漢語として完全に定着していくのである。

(37) 故ニ軍隊教育ニ於テハ此特有ノ資性ヲ砥礪擴充シ以テ事實上ニ其成果ヲ發揮セシメサルヘカラス（『軍隊教育令』、1913）

(38) 成果。成ハ成効又ハ成就ノ意テ果ハ結果ノ義テアル即チ良キ結果ノコト（『軍隊教育令綱領義解』、1913）

5. まとめ

漢語「成果」は、オランダ語「uitslag」、英語「result」などの訳語である和語「なりはて」を音読みしたことによって造られた新漢語である。「訓読みから音読みへ」という形態的な変化とともに、意味的にも「なりはて」から「できばえ」へ変化しつつあった。変化の原因については、類義語である「結果」からの影響のほかに、安定な意味的構造を求めるために語構成を修飾・被修飾関係で再解釈したのである。根本的には、使用者の漢語意識が作動している。20 世紀以降、「成就した結果。良い結果」という意味で次第に定着していく。

「訓読みから音読みへ」という過程で創出された近代新漢語の中で、恐らく「成果」以外にも意味再構築の現象が見られる。今後は、さらなる考察を行いたい。

謝辞

本研究は中国国家社会科学基金項目青年項目 19CYY047 の助成を受けたものです。
This work was supported by the National Social Science Fund of China (Grant No. 19CYY047).

注

1 陳（2012）では、和製漢語についてイ「訓読みから音読みへ変わったもの」ロ「日本独自の組み合せや表記（焼亡、量見、選考）」ハ「幕末近代以降の漢語訳語（抽象、哲学）」ニ「日中の異なる意味を語構成によって分析できる「激動、安置、洋行」」ホ「中国古典語を用いて外来概念に対応させた「社会、経済、文化」」と分けている。

2 『漢語大詞典』には「又給他立了産業, 就成果起這分家來」（『児女英雄伝』、年代不明）との例があるが、光緒年間（1875～1908）で成立したものと推測される。その「成果」は、動詞で「成立させる」の意を表すものである。

3 陳（2011）は「日本を代表する近代啓蒙家・思想家への過信があって、彼らが使っていた言葉なら、もう必ずといっていいほど、彼ら自身の手で造られたという「伝説」まで作り上げていった。」「その新語の多くはすでに先人の手によって作られたのか、または他人のものを自分の功績に仕立てたかである。」と指摘している。

4 安政 4 年（1857）に出版された『増補改正訳鍵』には「uitslag」の訳語として「成り果」が増補されている。『ドゥーフ・ハルマ』などの先行資料の影響を受けた可能性が高い。

5 「本書は現代の生活に必要な言葉を網羅したものである。だから現今全く用ゐられない古語はすべて省略し、その代りに新聞雑誌等にあらはれる新語、普通に用ゐられる外来語の類は努めて集めることにした。」（松本（1923）凡例）

6 明治中期成立の『言海』にも、「成就シテ映アル了。スキ手際」とある。

7 例えば、『西遊記』では「我們使些兇惡，一發結果了他」「卻結果了這許多獵戸」とのように「殺す」の意味で用いられている。

8 ここで言う「プラス」は、単にものができるという以上に、積極的に創造する、といった姿勢を含意することを指している。

9 諸橋轍次（1986）『大漢和辞典修訂版』巻六・「果」による。

参考文献

佐藤亨（2007）『幕末・明治初期　漢語辞典』明治書院
惣郷正明、飛田良文編（1986）『明治のことば辞典』・「成果」東京堂出版
陳力衛（2011）「近代日本の漢語とその出自」『日本語学』30　明治書院
陳力衛（2012）「和製漢語と中国語」、『お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター研究年報』8　お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター

陳力衛編、村山昌俊等著（2020）『近代の語彙（1）―四民平等の時代―』朝倉書店
永嶋大典（1970）『蘭和・英和辞書発達史』講談社
森岡健二・田島尚子（1965）「蘭和辞典の英和辞典に及ぼせる影響」『蘭学資料研究会研究報告』174　蘭学資料研究会
諸橋轍次（1986）『大漢和辞典修訂版』大修館書店
羅竹風（1993）『漢語大詞典』漢語大詞典出版社

資料

大槻文彦（1889）『言海』六合館（筑摩書房ちくま学芸文庫）
国立国会図書館デジタルコレクション（https://dl.ndl.go.jp/）：
　イーストレーキ著、棚橋一郎訳（1988）『和訳字彙：ウェブスター氏新刊大辞書』三省堂
　井上哲次郎（1881）『哲学字彙』東京大学三学部
　井上十吉（1919）『井上英和大辞典』至誠堂書店
　宇喜多小十郎（1879）『新撰伊呂波字引』中島利左衛門
　木越安綱（1913）『軍隊教育令』中央教育会
　軍需商会編（1913）『軍隊教育令綱領義解』軍需商会
　柴田昌吉（1873）『附音挿図英和字彙』日就社
　高島鞆之助（1897）『野戦砲兵射撃教範』大日本陸海軍兵書出版
　高橋新吉等編（1869）『和訳英辞書』American Presbyterian Mission Press
　中田幹母（1885）『雅俗漢語字引大全』東崖堂
　那普平斯著、堀誠太郎訳（1879）『婦女性理一代鑑』司命堂
　伯克爾著、土居光華著（1883）『英国文明史』日本出版会社
　藤田善平（1885）『広益漢語字解』中村芳松
　松本重彦（1923）『現代国語辞書』一誠社
　恵頓著、大築拙蔵訳（1880）『恵頓萬國公法』司法省
国立国語研究所太陽コーパス
金澤庄三郎（1907）『辞林』三省堂
ジャパンナレッジ Lib（http://japanknowledge.com/library/）：
　日本国語大辞典刊行会（2000～2002）『日本国語大辞典』小学館
金田一京助（1943）『明解国語辞典』三省堂
中國哲學書電子化計劃（https://ctext.org/zh）：
　呉承恩『西遊記』
　施耐庵『水滸伝』
　蘭陵笑笑生『金瓶梅』
土井忠生等編訳（1980）『日葡辞書：邦訳』岩波書店
中村正直（1872）『西国立志編初版』銀花堂（http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/saikoku/ginka/）
北京大学中国語言学研究中心 CCL 語料庫（http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus）
明治学院大学図書館和英語林集成デジタルアーカイブス（http://www.meijigakuin.ac.jp/mgda/waei/）：
　J. C. ヘボン（1867・1872・1886）『和英語林集成』初版・再版・三版

山田美妙『日本大辞書』（1895）明法堂
ヨミダス歴史館（https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/）
立教大学英和對譯袖珍辭書デジタルアーカイブ（http://library.rikkyo.ac.jp/digitallibrary/shuchinjisho/contents/con_01.html）：
堀達之助（1862）『英和対訳袖珍辞書』出版者不明
早稲田大学図書館古典籍総合データベース（http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/index.html）：
稲村三伯訳編（1796）『Nederduits woordenboek』出版者不明
桂川甫周（1858）『和蘭字彙』日本橋通（江戸）：山城屋佐兵衛
Doeff Hendrik（出版年不明）『道訳法児馬』，坪井信道（写）
広田憲寛（1857）『増補改正訳鍵』日本橋通（江戸）：須原屋茂兵衛
藤林普山（1810）『訳鍵』出版者不明
Google Books（https://books.google.co.jp/）：
H. Picard (1843). A New Pocket Dictionary of the English and Dutch Languages: Remodelled and Corrected from the Best Authorities, John Norman & Son.
HathiTrust Digital Library（https://www.hathitrust.org/）：
G. H. Napheys (1876). The Physical life of woman: advice to the maiden, wife and mother, Philadelphia, H. C. Watts & Co.
H. T. Buckle (1857). History of civilization in England, London, J. W. Parker and son.
H. Wheaton (1846). Elements of international law, Philadelphia : Lea and Blanchard.

経歴

鄒　文君（スウ　ブンクン）
中国広西チワン族自治区出身
2010 年 7 月　上海外国語大学（中国）日本文化経済学院日本語学科卒業
2013 年 4 月　慶應義塾大学大学院文学研究科国文学専攻日本語教育学分野修士課程修了
2017 年 9 月　立教大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程修了　博士（文学）学位取得
博士学位論文題目「原因・結果を表す漢語についての研究」
2017 年 9 月　中国人民大学（中国）常勤講師就任
現在に至る